

オウミア No.4

琵琶湖研究所ニュース

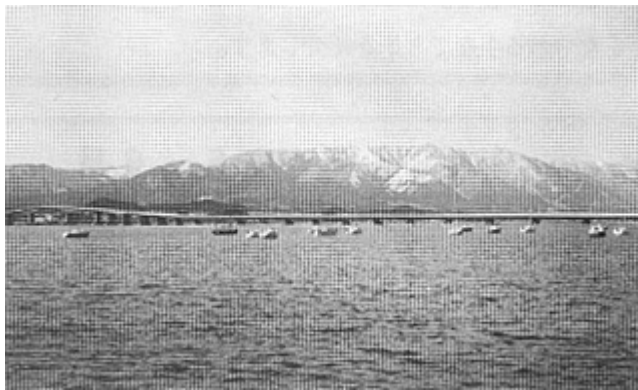
1983年3月

編集・発行／滋賀県琵琶湖研究所
〒520-0806 大津市打出浜1-10
TEL 077-526-4800

- 2年目をむかえる琵琶湖研究所・58年度予算概要
- [世界の湖1 タウポ湖\(ニュージーランド\)](#)
- [琵琶湖研究所 この1年](#)
- [琵琶湖研究所に期待する](#)
- [所員の紹介](#)
- [極地から琵琶湖へ\(4\)](#)
- [研究サロン](#)

[2年目をむかえる琵琶湖研究所] 58年度予算概要

琵琶湖研究所は、最初の経常年度を終え、2年目をむかえようとしています。
58年度予算の総額は218,037千円で、2年目も研究所の基礎づくりと通常活動の2大業務を手がけていくこととなります。



比良の雪景色

4本柱のプロジェクト研究

58年度のプロジェクト研究費は72,310千円で、次の4本の研究テーマがあげられています。

- (1) 地域環境研究の方法
- (2) 琵琶湖集水域の現況と湖水への物質負荷
- (3) 湖岸機能に関する研究
- (4) 湖水の動態に関する研究

57年度に設定されていたプロジェクト研究のうち「データベースの開発」は初年度の役割を終え、情報管理部門の通常業務に組み込まれています。また、(3)湖岸機能に関する研究は、(2)のプロジェクトの一部に含まれていたものを独立させたもので、(1)地域環境研究の方法とともに新顔のプロジェクトです。

またプロジェクト研究とは別に経常研究に10,703千円、実験室関係の整備費として18,500千円の予算が計上されています。

図書資料の整備とデータベースの運用

琵琶湖研究の情報センターをめざす研究所として、情報管理部門には図書資料を中心とする情報収集費として約25,000千円が計上されています。また、文献検索などデータベースの運用が本格的にはじまります。

ビデオによる研究所の紹介も

広報研究交流部門では昨年度にひきつづき、所報(年1回)、ニュース(年4回)を発行するほか、58年度に繰り越しになっている論文集(琵琶湖研究モノグラフ)も発行の予定です。またシンポジウム、セミナーなども開催します。

なお、研究所の施設や業務内容を紹介するビデオテープが完成しました。ビデオコーナーも開設予定です。

世界の湖(1)

タウポ湖(ニュージーランド)

ニュージーランドは日本から赤道をはさんで反対側の等距離にあって、羽も尾もない飛べない鳥、キウィで有名な国です。

タウポ湖はこの国の北島の中ほどにあるニュージーランド最大の湖ですが、琵琶湖とは双子のようによく似ています。形はやや丸く、面積が612km²(琵琶湖の約90%)、平均深度97mで、周りが山に囲まれ、その山地に降った雨はすべて湖へ流れ込みます。ただ、周囲の山々はなだらかな丘のようなもので、羊の放牧が行なわれ、所々に高いユーカリの木がポツポツ見えるのどかな田園風景が続いています。湖尻には流れ出る川が1本、瀬田川のようについています。湖の周辺には大きな都市がなく、河口に小さな町が1つあるだけで、湖の水は澄んでおり、最大透明度21mを誇る美しい湖です。

マスがたくさん釣れ、レジャー釣が盛んです。湖畔から見る水の色はあくまでも濃く碧く、なぎさは遠くまで水底の白い石がくっきりと見え、いわゆる貧栄養湖に属します。つまり、湖の物理的条件が琵琶湖と同じで、化学的状況がまるでちがいます。湖のほとりに、ニュージーランド科学産業調査庁の生態学局淡水研究所があって、湖の現況の科学的な解明と水資源の保全が図られています。本年2月、第15回太平洋学術会議に出席の際、私はこの研究所に招かれました。所長はエディー・ホワイト博士。赤ら顔、銀髪の大柄な人ながら、コーヒーなども自ら入れてくれる気さくな人。こぢんまりとしたクリーム色の民家風建物に7名の研究者と8名の技官がいて、継続的な湖水の分析のほか、窒素、リンの負荷や湖岸地下水の水質の研究を進めています。

湖から程遠くない所に温泉が湧き、地熱発電が行われていてタウポの町にも電力が供給されています。(倉田亮)



タウ

ポ湖(円内はホワイト所長)

[琵琶湖研究所 この1年]

昨年4月1日に発足した当研究所は、1年目を終えようとしています。ここで、この1年をふりかえり、研究所にまつわる主なでき事をご紹介します。

1982年4・5・6月

- ・4. 1 琵琶湖研究所発足
吉良所長以下19名、建物は打出浜に建設中のため、県庁前の滋賀会館3階仮事務所でスタート。
- ・5. 7 第1回研究集会開催
所内研究員を中心に、以後毎週火曜日をベースに開催した。12月からは公開研究集会とし、県内各試験研究機関からの参加も始まった。
- ・5. 11 赤潮発生(新唐崎南沖500m)6年連続発生以後5月には18, 24, 25, 26日に赤潮が発生した。



8月2日台風10号の影響で増水した大

戸川(大津市上田上牧)

1982年7・8・9月



滋賀会館仮事務所

- ・7. 17 中主町湖岸一帯に新プランクトン(ペリディニウム・ペナルディ)の異常増殖による赤潮発生。
- ・9. 4 データベースシステム研究会中間報告書作成琵琶湖情報を一元的に蓄積管理して、行政や一般の人々にも広く提供していくデータベースシステムの研究を目的に、5月12日の第1回から第6回までの研究内容を要約した。当研究会は、2週間に一度開催した。

1982年10・11・12月

- ・10. 13 中国湖南省環境保護、都市建設技術視察団が琵琶湖研究所を訪問、研究集会に出席。
- ・10. 4 第1回研究評議員会開催
- ・11. 18 中央公害対策審議会が湖沼の窒素とリンに関する環境基準を答申。



12月1日 研究所竣工式

1983年1・2・3月

- ・1. 12 第1回琵琶湖研究シンポジウム開催
研究所の創立を記念して「琵琶湖研究の課題と方向」をテーマに10人の報告が行なわれた。参加人員286名。
- ・1. 25 第1回地域経済シンポジウム開催
当研究所の研究集会を拡大し、所外からの参加者も加わり、琵琶湖をめぐる環境管理について、主に社会科学分野からの議論が行なわれた。参加人員81名。



1月4日御用始所員一同勢揃い 1月12日第1回琵琶湖研究シンポジウム

LBRI OUTPUT

- ・1月12日に開催した第1回琵琶湖研究シンポジウムの記録集が完成しました。
- ・1982年度の『琵琶湖研究所所報』を発行します。1年間の業務告報、琵琶湖に関する論文の抄録リスト、研究協力者名簿などのほか特集記事を掲載しています。
- ・『琵琶湖研究所ニュース』第3号(昨年12月発行)は多少残部があります。
- ・研究所の案内ビデオを制作しました。

[琵琶湖研究所に期待する]

藤野良幸(財都市調査会 副理事長)



私が琵琶湖問題にかかわってから30年になる。しかし琵琶湖については、まだ分からないことがきわめて多く、それだけに琵琶湖研究所の発足は、わがことのように喜ばしく、研究所が県民の中に健全に育っていくことを、心から期待している。昨年末の研究所の竣工式の時、梅棹忠夫・国立民族学博物館長は、「琵琶湖研究所は、学術研究所であると同時に、政策研究所としての性格をあわせもってほしい」と、述べられたと聞いているが、私も全く同感である。20名程度のこぢんまりした組織で、研究所に対する県民をはじめ、各方面のさまざまな期待に応えることは、きわめてむづかしい。そこで研究所の活動方針として、広く大学をはじめ官公、民間の研究機関の参加協力を求めることとされているのは、きわめ

て適切な考え方である。しかもこのような広範な研究交流によって、琵琶湖研究所は、より深くより広く発展することが期待される。

とくに政策研究は、学術研究とは異なり、その提案が県民をはじめ関心をもつ人達に理解され支持され、そして実施に移されなければ意味はない。政策の実施は行政の仕事であっても、理解を深める努力は、この研究所の大きな仕事でなければならない。研究の成果が、いかに立派なものであっても、一般の人達に正しく理解されるためには、研究の実施以上に時間と努力が必要である。この意味で広報・研究交流の役割は大きい。

[極地から琵琶湖へ(4)]

研究員 伏見 碩二

今冬の雪は例年にくらべて少なかった。おかげで、オープンしたばかりの朽木村のスキー場は雪不足にくわえてまだ知られていないこともあり、訪れる客が少なく、関係者が苦労したという。今年の降雪は余呉町などを中心とした「北雪」タイプだが、1昨年の冬は朽木村などに集中した「中雪」タイプだった。そして、ご存知のように、2年前は広域的な豪雪だった。

このように、雪は年によって降る量も降り方も異なる。そして、積雪は裏日本的な潮北と表日本的な湖南の対照をはっきりさせる。北部と南部の各地域で家のつくりにも違いがみられるように、人の生活様式にも各地域特有の伝統があった。また、琵琶湖から集水域山地への地形変化と対応して、漁村-農村-山村社会という同心円的な地域的特色があった。

都市化の進行とともに、炭焼きなどの山村の生活様式が変化している。例えば、高時川の針川などでは廃村が、また姉川の甲津原などではスキー場を中心とした民宿村がみられるようになった。これらの炭焼き村に伝わっていた「山の神講」などのしきたりはきえつつあるようだ。この四半世紀の、急速な社会・自然環境の変化は、これまでの地域にねざした伝統的な生活様式をけしてゆく新しい波にみえる。

だが、冬ともなれば、湖北の村里はぶたたび深い雪にうもれる。新しい波の影響がいかに大きくとも、湖北の村びとと雪との結びつきがきえることはない。雪おろしの労力を省く伝統的な急傾斜のカヤぶき屋根は、トタン屋根に変わったとはいえ、いぜんとして伝統的なスタイルを保っている。新しい波にもまれながらも、伝統的な知恵が生かされている。

「新しいチャン(濁酒)をのむと頭痛がする」と、ネパールの人はいう。急速な都市化のすすむヒマラヤのこの王国の生活様式も大きく変化している。あたかも新しい都市化という濁酒を急激に、そして大量にのまされているかのようだ。その頭痛は、新しい波の影響をもろにうけた第四の極地・琵琶湖の汚濁のうめきにもにているか。ヒマラヤの人たちは、「濁酒は十分に熟してから飲むべし」といっている。

[研究サロン]

人間とコンピュータ(4) 研究員 大西行雄

この文をCとする Jを1 Iを0 Lを2 とする Lが文Cの総文字数以下である間 次の指示を繰り返せ もしも文CのL番目の文字が 文Cの最初の文字と等しいなら もしも文CのL-1番目の文字が文Cの最初の文字と等しくないならば JをJ+1にIを0に置き換えよ 分岐終端 そうでないならばIをI+1に置き換え 文Dの第J行目のI番目と文字を文CのL番目の文字に置き換えよ 分岐終端 LをL+1で置き換えよ 分岐終端 繰り返し終端その結果
この文をCとする

Jを1

Iを0

コンピュータプログラムの一部を無理に日本語に置き換えてみるとこんなことになるのか。空白を区切り記号として文章を分解しなさいというありふれた命令がこのように記述される。コンピュータのプログラム言語には多種のものがあるが、上の例のように厳密で論理的な表現を用いる点では共通している。人とコンピュータという異質なものを相互につなぐためのコミュニケーションの姿である。こんな表現は使わない、われわれの日常会話では。特に強い同質意識を持つ集団の内部では、信頼関係と、相補的な不信関係がコミュニケーションを形成し、言葉は補助的に用いられるにすぎない。身ぶり、しぐさのあらゆるものが動員されて、強力で効率的な意志伝達網が形成される。主役は集団の同質性意識である。

逆のことを考えれば、同質性という基底をもたない集団において、言語表現は意志伝達機能を果し得ない。あいまいで不十分な言語表現は各自によってどのようにも解釈できる。不信の種をまき、言葉が逆に意志伝達網を分断してしまいかねない。

そのようなことは、企業の合併などで異質の集団が同質性を獲得していくプロセスにおいて深刻な問題をひきおこしている。異なる分野から人が集まり、組織を作った琵琶湖研究所も、そんな問題を抱えているようである。前のプログラムを見習うこともないだろうが、ある程度厳密な言葉の使い方が必要となるだろう。信頼感を築く土台として。

●編集ノート

▲早や春のいぶきを感じずる3月、年度末はいやなもの。時間との競争で、忙しい研究員から原稿が手渡されるまでやいやの催促。気があせるものです。

▲所員紹介も今号で全員登場しました。ファンレターでも出して、交流を図って下さい。

▲琵琶湖問題に関する、あんなこと、こんなこと……いろんな情報をお知らせ下さい。(編集部)